

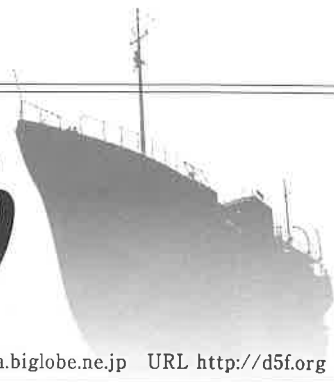
2016.03.01
No.392

(3・4月号)

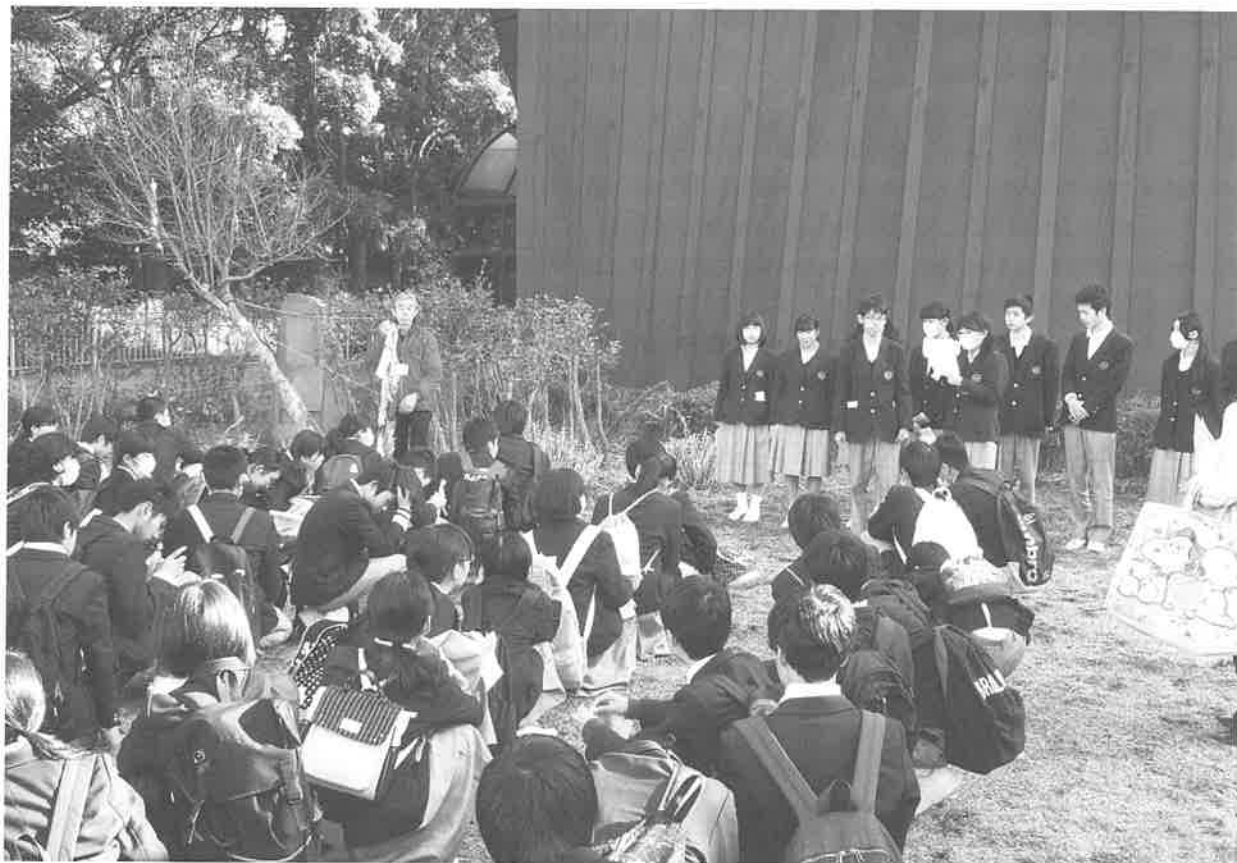
福竜丸だより

発行：公益財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島2-1-1 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail : fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



一、二月の寒い季節にも各地から修学旅行生が来館します。船を見学し展示館前のひろばで平和のセレモニーをおこなう学校もあります。



忘れることは繰り返すこと 展示館開館四〇年から未来への航海

二月初旬、広島の中学生一五〇人の見学がありました。新幹線を降りて最初の見学地が第五福竜丸とのこと、事前学習もしっかりおこない、ボランティアガイドの説明に真剣な眼差しで応えていました。

見学終了時には全員が集まって平和のセレモニーをエンジンの横で挙行、司会を担当した生徒から「ヒロシマの子どもとして、核兵器廃絶への思いを胸に、この場所を忘れません」との力強い言葉が聞かれました。

読み上げられた平和宣言には、「平和な世界を創るためには、過去の悲劇を直視することも必要です。辛くてもそうしなければ、私たちは過ちを忘れ平気で繰り返してしまふからです……第五福竜丸が被ばくした三月一日をみんなで覚えましょう」とあります。

一月初旬には広島の高校生二名が来館、丹念に時間をかけて見学し感想文を送ってくれました。「水爆についての知識があまりなかったので、驚くことが多かったです。水爆の被害や核兵器の実態について、家族、友人などに教えて、少しでも多くの人と核兵器について考えていこうと思いました。」

「第五福竜丸のことや今の世界の核の事情を知ることができました。反核・反戦の思いが伝わってきました。」折から北朝鮮が水爆実験を行ったと発表し、展示館にもテレビや新聞の取材や問い合わせが多くありました。どのような理由があろうと、どの国であろうと核実験は許されぬ。世界の核兵器禁止を求める世論と非核の国々の流れに逆行するものです。

開館四〇年を迎えた展示館と第五福竜丸の存在は、ますます重要です。

3・11ビキニ記念のつどい

太平洋核実験・被ばく船員を追って

第五福竜丸とビキニ事件について考える市民講座「3・11ビキニ記念のつどい」が、二月二七日東京スポーツ文化館で開催され一〇〇人が参加しました。

協会を代表して奥山修平理事から、第五福竜丸の被災した核実験から六〇年以上を経たため私たちが考えるべきこと、多くの研究者やジャーナリストらによって問題



右から豊崎さん、山下さん、吉田さん（撮影・河田透）

が追求されてきたことが紹介され、開示された公文書の解説もはさみながら、市田真理学芸員がつどいを進行しました。

太平洋核実験を概観する

豊崎博光

フォトジャーナリストの豊崎博光さんは、今年が太平洋での最初の核実験（一九四六年、米・ビキニ環礁）から七〇年目、九六年の最後の核実験（仏・モルロアとファンガタウファ環礁）から二〇年目に当たり、半世紀にわたり絶え間なく核実験がおこなわれていたと指摘。第五福竜丸も被ばくした水爆実験キャッスルシリーズ（五四年六回）では、放射性降下物による死の灰により地球全体が被ばくしたと、イギリスが行なったオーストラリア、モルデン島、クリスマス島での実験、フラ

ンスのポリネシアでの実験、核魚雷や原子力潜水艦からの核ミサイル発射実験などが紹介されました。地下核実験による海洋汚染、実験や除染に従事した兵士たちの被ばく、兵士として住民として巻き込まれていく先住民の被害などグローバルな核被害があると警鐘を鳴らしました。

三〇年におよぶ高知の漁師との対話

山下正寿

高知県で活動する山下正寿さん（太平洋核被災支援センター）の三〇年以上にわたる調査はこれまでも映画や書籍で紹介されてきました。

高校生たちによる地元漁師への聞き取りが始まったのは広島・長崎の被爆四〇年のことでした。長崎で被爆し太平洋核実験でも被害に遭ったことを苦に自死した青年を知ったことがきっかけでした。

証言だけでは被ばくの立証が思うようにできない中、広島科学者たちの協力で歯や遺伝子検査が行なわれ、外務省・厚生労働省から資料が開示されるに至りました。こう

した動きを受けて二〇一五年高知県が被災漁民の健康相談会を実施。元漁師と遺族一〇人が二月二六日に「労災申請」にあたる船員保険の適用を全国健康保険協会に申請した経緯が語られました。

核実験被害について、長年「余計なことを言うな」と互いに沈黙を守ってきた漁師たちが語り始めたのは、つらい思いだけでなく、仕事の厳しさや漁師の誇り、生き様を伝えたかったからだともいいます。被害の解明には科学的実証とともに、こうした共感も必要なのです。

東北・岩手の漁船をさがして

吉田栄一

岩手県在住の吉田栄一さんは、三年前の3・11ビキニデ1集会に参加して全国に被害があつたことを知り、地元での調査を始めました。

岩手県には宮古、釜石、陸前高田、種市に漁港があり、新聞や公文書等から特定した漁船関係者を探し当てました（福竜丸だより一月号参照）。厚労省の資料開示の動きに呼

応し、県の開示文書で船名が隠されていたものを、開示させることができました。

直接訪ねたり電話で聞き取りをした一四人のうち五人が東日本大震災で津波被害に遭っており、古いアルバムなどが流されてしまったことや、電話をしてもつながらず震災被害の影響と考えられることなども報告されました。

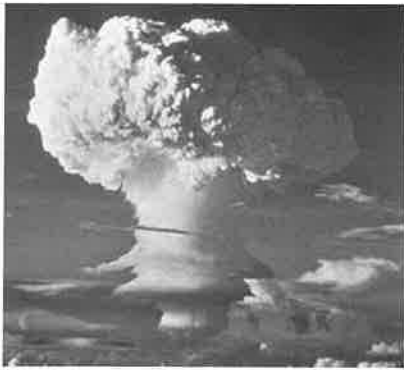
一九五四年以降も続けられた核実験による被害や証言もあるはずと考え、今後は宮古・釜石での調査もしていきたいとのことです。

ビキニ被災検証会

開示資料や聞き取り調査を広範な地域で共有し、全容解明に取り組もうと、ビキニ被災検証会が立ち上げられ、研究がすすめられています。二月二十八日には、第三回目の集まりが静岡市で開催され、協会から安田和也・市田真理学芸員が出席しました。三重県・静岡県からの報告や、社会労務士、弁護士らも参加し議論しました。また同じ会場で、全国ビキニ被災船救済検討チームも結成されました。

太平洋核実験 70 年をたどる

1946-2016



広島・長崎への原爆使用から1年後の1946年7月アメリカは第2次世界大戦後の核実験をマーシャル諸島のビキニ環礁で実施、ソ連も原爆開発を急ピッチですすめ、東西冷戦下での激烈な核軍拡競争の幕が切れておとされることになる。ソ連の原爆保有は49年、アメリカは50年1月水爆開発に着手し52年11月に最初の水爆マイクを爆発させた。一方ソ連は53年8月に“水爆実験成功”と発表した。

アメリカは、実戦使用可能な水爆開発を急ぎ54年3月1日から5月14日、水爆実験シリーズ、キャッスル作戦をおこなった。以下、太平洋での核実験をたどる。

◆マーシャル諸島でのアメリカの核爆発実験…1946年7月1日～58年7月22日（すべて大気圏実験）ビキニ環礁で23回（水爆11回）、エニウエトク環礁での実験は48年4月～58年8月に44回の核実験（7回は水爆、58年4月にハードタックI作戦としてエニウエトク環礁北部海域で気球に吊った爆発実験を含む）。

キャッスル作戦の総爆発力約48メガトンは、マーシャル諸島で行った67回の核実験の総爆発威力（約108メガトン）の約45パーセントを占める。

アメリカはマーシャルでの核実験を終了させた後も55年5月に太平洋北西部海域の水中で実験（ウイグナム作

戦）。58年8月～62年11月ジョンストン島で12回の核実験（水爆は5回）。62年5月ドミニク作戦：太平洋北西部の海域でポラリス型原潜から打ち上げての実験。62年5月のドミニク作戦は太平洋北西部の海域で核魚雷アスロックのシステム確認実験。62年4～7月クリスマス島（現キリバス共和国領）で24回の空中投下実験（うち水爆7回）。

地下核実験に移行したあとは、65年10月、69年10月、71年11月アラスカ州アリューシャン列島アムチトカ島につくった立坑で3回の実験（うち水爆は2回）。

*アメリカが、太平洋で行った核実験の総爆発威力は約158メガトンで広島に投下された原爆に換算して10,534発分に相当する。

*

◆イギリスは、1952年10月に西オーストラリアのモンテベロ諸島で初の原爆実験をおこない核保有国となった。

以後、大気圏内核実験として53年10月に南オーストラリア州イミューで2回の核実験。56年9月～57年10月南オーストラリア州マラリングで7回の核実験。57年5月～6月南太平洋モールデン島（現キリバス共和国領）で3回の水爆実験。57年11月～58年9月南太平洋クリスマス島で6回の核実験（うち水爆は4回）をおこなってきた。

*

◆フランスは、60年2月に原爆を保有した（実験はアルジェリアのサハラ砂漠）。

太平洋での実験は、大気圏内実験として66年7月2日～74年9月14日ポリネシア、モルロア環礁で37回の核実験（うち水爆は8回）。66年9月～70年8月ポリネシア、ファンガタウファ環礁で4回の核実験（うち

水爆は2回）。

地下核実験は、75年～96年モルロア、ファンガタウファ環礁で143回おこなった。

■アメリカ、イギリス、フランスが太平洋地域で行った核実験（1945年～1996年）の総数は、312回（広島、長崎への原爆投下を含む）で総爆発威力は約179.4メガトンで広島型原爆に換算して約11,960発分に相当する。

*

■核被害者 マーシャル諸島では水爆ブラボーによる死の灰をあびたロンゲラップとウトリック住民とビキニ島住民の一部が60年代末に帰郷し被ばく、エニウエトク住民とされてきたが、アイルック住民の被ばくも明らかになっている。また米軍資料にはマーシャル諸島全域に汚染が広がっていたことも示されている。さらにポナベヤグナムにも汚染が広がったことがわかっている。実験参加の米兵の被ばくは、46年のクロスローズ作戦以降、数の詳細は不明であるがかなりの兵士が被ばくしている（ちなみに米核実験全体を通じて兵士や作業員への被ばくに関する補償は45万人に及ぶ）。

イギリスの実験では、同国兵士のほかにオーストラリア、ニュージーランド、フィジー兵士が被ばく、実験中の「黒い霧」（死の灰）で先住民アポリジニーが被ばくしている。

フランスのポリネシアでの実験では、兵士、実験場で働いた現地の人びと、モルロアの風下住民に病気の発生が認められるが仏政府は被害を認めない。（本稿は豊崎博光さんの「3・1のつどい」（2月27日）での報告資料を元に編集部が作成した）。

*左上の写真は52年11月の最初の水爆実験マイク

ビキニ被災六二年

大石又七さんに聞く

水爆ブラボーによる被ばくから六二年。第五福竜丸元乗組員の大石又七さんは脳出血で倒れた後も中学校・高校での講話を続けています。核をめぐる状況に対する思いなどをうかがいました。聞き手は、長年ビキニ事件の取材を重ねている共同通信の上野敏彦編集委員です。

—北朝鮮が今年に入って水爆実験を強行し、人工衛星と称して長距離ミサイルを発射しました。

水爆がどんなに恐ろしいものであるかは当事者としてよく知っている。それだけにと

んでもないことと思うが、予想された流れではあった。北朝鮮を世界が追い詰めすぎたのだと考える。日本と北朝鮮は同じアジアの国同士なのに、日本はかつて戦争をした敵国だったアメリカに近づきすぎている。

戦前の朝鮮半島への植民地支配の反省を考えれば、北朝鮮との関係にはもつと気を遣わなければいけない。北の核開発を非難するのなら、同様にアメリカの核保有も厳しく問題にしていかなければバランスがとれない。その辺りを一般の人々はどうか考えているのかを、自分としては知りました。

いと思う。

—東日本大震災による東京電力福島第一原発の事故から五年になる。日本はどう変わったのでしょうか。

私は原水爆も原子力発電も同じ危険なものと考えている。核と人類は共存できないのだから両方ともなくしていくべきだ。それなのに一向にそうならないのは残念だ。福島の事故で原発の問題点を国民は広く知ったにもかかわらず、安倍首相は原発を海外に輸出しようとし、国内では原発の再稼働を認めましたが、国民は納得できる説明を受けたいとは言えないでしょう。学者は経済に結びつけて原発の是非を考えるが、大事なことは物事の善悪で判断するべきではないか。

—一九八四年に証言を始めて、国内各地はもとよりアメリカやマーシャル諸島でも講演を続けた。病を押しながら、その数は約八百回にも及びます。

福竜丸の仲間たちは怒りを抱えたまま死んでゆき、米ソ

をはじめ各国の核実験は止まることがない。放射能事故の恐ろしさについて身を持って知っている自分としては、それを多くの人に伝える義務のようなものがあると思って、ここまで頑張ってきた。

講演では中学校に呼ばれることが多いが、若い人たちの反応はともいいですよ。長崎に修学旅行に行くので、その事前準備にと声を掛けられることもある。

ビキニ事件の話をする、そんなことが昔あったのと、子どもたちは新しい感覚で反応してくれる。福島の原発事故以後、『世の中、大石さんの言うようになった』という感想文を寄せてくれたことも。インターネットを使って世界中と情報交換をして、どうやったら核兵器をなくせるかを色々な国の人と話し合っています。

—第五福竜丸展示館が開館して四〇年。巨大な木造船に屋根をかぶせて造った博物館は他に例がありません。

被ばくした過去を断ち切りたくて、焼津から東京へ逃げ

てきた。福竜丸が夢の島でぐみに埋もれて沈みかけていると聞き、正直迷惑な気持ちになった。それでも、一緒につらい体験をしたので、最後まで見守ろうという気持ちで夢の島へ出かけた。その船がこうして展示館で保存されるようになってから研究者たちの手でいろいろなことが分かってきた。今ではビキニ事件の恐ろしさを伝える貴重な材料になっていると思う。

気になるのは、展示館の庭の隅に置いてあるマグロ塚の行方です。本来は築地市場の放射能マグロを埋めたところに置くべきなのだが、現在はマグロの絵が書かれた金属プレートだけを地下鉄大江戸線の地上出口の壁に掲げてある。

築地市場は今年の秋に近くの豊洲へ移転するので、このプレートも場所にもってきたい。ビキニ事件が起きた時、放射能騒ぎで皆マグロを食べなくなつた。そうした歴史を多くの人に知ってもらうためにも、マグロ塚の存在は必要だと考えているのです。



保存の実現から四〇年

青木佳子さんインタビュー

第五福竜丸展示館は今年で開館から四〇年を迎えます。第五福竜丸の保存運動に取組み、展示館開館後もボランティアの会設立やガイドとして活躍された青木佳子さんの半世紀に及ぶ福竜丸との関わりについてお話を伺いました。

保存に関わるきっかけ

青木さんは東京都建設従業員組合書記長の三井周さん、江東区職員労働組合の若島幸作さん、石川島播磨重工の深井平八郎さんら三名とともに「三羽鳥・一姫」と言われ、保存の実現に貢献しました。

第五福竜丸が夢の島に捨てられた当時、私は江東区の小学校に勤務し、区内の教員で作る「江東教師平和の会」の副会長を勤めていました。同会会長だった掘田尊生さんから「夢の島に福竜丸があるらしい、見てきてくれ」と言われ、自転車で見に来たことが保存に取り組みきっかけでした。

忘れられたビキニ被災

船の保存といっても、当初は何をすればよいのかさえ分かりませんでした。ビキニ水爆についての知識もなく、勉強しようと思ってもまとまった資料もありませんでした。平和団体の事務所や専門家の方などを訪ねて第五福竜丸について勉強しました。



福竜丸が捨てられた海の前で当時を振り返る青木さん

当時はビキニ被災から二〇

余年が経過していましたが、一般の人々の間では第五福竜丸は忘れ去られていました。展示館開館後、来館者から「焼津の船なのになぜ夢の島にあるのか」とたびたび問われました。第五福竜丸は被ばく後、国が買い上げ、名前を変えて品川の水産大学で練習船として九年間使われました。この間に、第五福竜丸は人々の心から消え、ビキニ被災や原水爆の恐ろしさも忘れ去られてしまったのではないかと思います。

初期の保存運動では、とにかく人々に伝えなければと「ビキニの生き証人、第五福竜丸を保存しよう」という自作の横断幕を掲げ、街頭で賛同署名や募金を集め、保存を訴えました。また、福竜丸の普及にもなると、自分たちでデザインしたオリジナルのバツジを作り販売するなど、地道な活動を続けました。

平和への思い

終戦当時、私は女学校の四年生でした。戦時中は学徒動員のためまともな教育を受けられず、人間を育てるために

はない、戦争のための教育を受けてきました。そういった体験から、平和を学び、伝えることが重要だと考え、教師になってからも平和活動に携わってきました。

保存の意義

第五福竜丸は目に見えない放射能の被害や原水爆の恐ろしさを警告する船として大きな意味を持っているとの考えから、保存の意義を訴えてきました。

また平和産業であるマグロ漁に従事する船が一発で何万人も殺傷可能な水爆実験の被害にあい、日本中で魚が食べられなくなるといふ出来事に核と人類は共存できないと強く思いました。

四〇年を迎えて

第五福竜丸展示館は小さな施設ですが、とても大きな意義を持っています。ここに来れば誰もが原水爆や平和につ

いて考えることができ、久保山さんの死や、多く漁船の被害から放射能の怖さを知ることができます。

核の恐ろしさを口で説明しても、実感することは簡単ではありません。ですが船が保存されていることで、理解に近づくことができると思っています。平和を願う多くの人々の努力が実り、全ての人が触ることのできる形で船を残すことができて本当に良かったと思っています。

展示館開館から四〇年を迎え、これからも多くの子どもたちに福竜丸を見に来て欲しいですし保存を手掛けたものとして、この船に関わり続けていきたいと思っています。

インタビューを終えて、数時間では語り尽くせない青木さんの熱意に福竜丸の体験を伝えていくことの責任を強く感じさせられました。青木さん始め多くの市民のはたらきで第五福竜丸は保存、展示されています。そうした経緯が展示館の持つ大きな価値の一つなのだと思えました。

連載⑤

晴れた日に
雨の日に

山村茂雄

第五福竜丸展示館が開館し

たのは一九七六年六月一日。思えばこの年この日に前後して、第五福竜丸保存運動につながり合うように、広島・長崎の実情、ビキニの核被害を伝え広げる運動、原水爆禁止運動の展開など、市民運動の取り組みがありました。

翌一九七七年には、国連NGO主催の「被爆の実相とその後遺・被爆者の実情に関する国際シンポジウム」開かれ、また、一四年ぶりの統一世界大会「一九七七年原水爆禁止世界大会」が開かれています。

*

被爆問題シンポジウムの開催、統一世界大会の開催に到る道筋には、それぞれの努力、

働きが重ねられました。

なかでも二月二日に出された「広島・長崎アピール」被爆の実相究明のための国際シンポジウムを前にして「は、分裂久しい原水爆禁止運動の統一をこの機に回復するその大同を示したものでした。

署名人は上代たの、中野好夫、藤井日達、三宅泰雄、吉野源三郎の五氏、「平和を求めめる日本のあらゆる個人・団体・諸組織が、過去の行きがかりを乗り越え、力を一つに合わせることをよびかけ、別紙「核廃絶をめざす運動とその展開」をそえて「核禁止を要求するわが国のあらゆる平和勢力の連帯と団結」を求め、決意を促したものでした。

事態は急速に展開します。

三月一七日、日本共産党と総評との「新しい統一組織体制をつくることをめざし、具体的方策を検討する」ことで合意。四月九日には全地婦連・日青協は「原水爆禁止の統一」とNGO主催「国際シンポジウム」成功のための声明」が出されます。

五月一九日、原水爆代表委

員森瀧市郎氏と原水協理事長草野信男氏との合意書、「八月の大会は統一世界大会として開催する」「国連軍縮特別総会にむけて、統一代表団をおくる」が発表され、六月三日、原水爆禁止統一実行委員会が結成されます。

一九七七年原水爆禁止世界大会は八月三日から六日、広島で開かれました。大会は七八年の国連軍縮特別総会成功に向けて国際共同行動をよびかけます。大会日程のなかの五日には、被爆問題国際シンポジウムの成果を報告するラリーが組まれたのでした。

*

原水爆禁止運動統一の大同を示した「五氏アピール」については、連載⑧(二〇一一・五)で記したことがあります。

吉田嘉清さんの著書『わが戦後行動』(八〇年刊)に収録の中野好夫、古在由重、草野信男三氏に吉田さんが加わった座談会から五氏アピールの起草過程や五・一九合意の経過を紹介したものでした。

五氏アピールは吉野さんが書き、別紙「核廃絶をめざす運動とその展望」を古在さん

が起草したこと、集まったのは岩波書店地階の会議室で新村猛さんも加わったことだ。五・一九の時も最後の調印は岩波で……など。五氏アピール署名人に古在さんは入っていないけれど会議には全部出ていたことも話されています。吉野さん、古在さん、中野さん、盟友とも言える三氏の友情と信頼の深さ、ともに平和・反核への強い思い、運動参加者としての位置に立ちつづけられたのでした。

*

「ボクは今年から平和行進に参加する」中野好夫さんが「宣言」されたのは一九八一年五月三〇日、二三日に死去された吉野源三郎さん告別式(千日谷会堂)の帰途、一人ほどこで立ち寄った喫茶店で故人の思いを語り合っているなかのことだといえます。

六月二九日中野さんは滋賀県大津市内の行進を歩きます。朝日新聞の紙面には、いっしょに歩く新村猛さんが写っています。八四年は六月三日、静岡県の富士宮と由比間に中野さんの姿がありまし

た。折からの豪雨のなかを中野さんは歩きます。四回目の平和行進参加、中野さん最後の平和行進になりました。この年のビキニデーでは、世界大会準備委員会主催した焼津集会所に先立って行われた故久保山愛吉墓参行進も歩かれました(連載⑧)。

*

「平和行進参加」を「宣言」したその日の懇談で、もうひとつの行動「核問題勉強会」を開くことが話し合われました。七七年統一世界大会後、毎年の大会準備の論議の大半は組織論議に費やされてきました。組織論議に偏らずに大会課題に関連する勉強もすることにして、「一貫して民主主義と平和のために「知こそ力」という姿勢を律義に貫いた」(世界大百科辞典)中野さんの姿勢に合致した「行動」でした。

敬して思えば、盟友吉野さんの遺志を体して、自ら歩きともに知に学ぶ、中野さんの面目は鮮やかでした。

中野好夫さんをふくめ、中林貞男(日本生協連会長)、
(7めん下につづく)

書評

長澤克治著

小児科医ドクター・ストウ伝

豊崎博光

一九五四年三月一日にアメリカが行った水爆ブラボー実験の放射性降下物をあびて被ばくさせられたマーシャル諸島ロンゲラップ島の人びとは、ブルックヘブン米国立研究所の医師の「検診」をうけてきた。その「検診」について人びとは、尿と血をとるだけでどのような健康被害が起きているかは教えてくれず治療もしてくれないと言った。

生後約一カ月で被ばくし、八歳になったところに成長が止まった男は、身長測定の日盛りの中で何度も写真を撮られた



A5判288頁、2015年11月
平凡社刊、2000円(税別)

ためにすっかり写真嫌いになったと言った。

アメリカ生まれの日系二世で、小児科の医師となったワタル・ストウの生涯取材し調査した結果をまとめた本書は、ロンゲラップ島の被ばく者などに対して行われた「検診」の実態も明らかにした。

とくに、ストウ医師を含めたアメリカの小児科医や科学者が原爆投下で被ばくさせられた広島と長崎の子供たち、水爆実験で被ばくさせられたロンゲラップ島などの子供たちに対して行った「検診」の内容は戦慄をおぼえる。

その「検診」は、原爆や水爆発の放射線をあびせられた子どもたちが成長と発達にどのような影響をうけているかを調べるためであるとして子どもたちを裸にして体毛や性器の成熟度を調べ、成長の

度合いを示す骨年齢を測定するために手首や肘、膝にエックス線を照射するというものである。骨年齢を測定するためのエックス線照射は過剰な放射線をあびせる行為で、子どもたちの親の承諾もなく行われたそれは「検診」ではなく「調査・研究」というまったく別のものである。

ロンゲラップ島の被ばく者は被ばく直後に「プロジェクト4-1」研究(高爆発威力の放射性降下物によるベータ線及びガンマ線による人間の反応研究)の研究対象とされたが、一九九五年にクリントン大統領の諮問委員会が公表した放射線人体実験報告書は、研究は核攻撃をうけた場合の放射線被ばくを防ぐ方法を知るため、被ばく者の治療に役立てるためで人体実験ではなかったとした。

目的が放射線防護法を知るため、被ばく者の治療に役立つとしても被ばく者をモルモットのように扱う「検診」は許されるものではない。

しかし、放射線防護研究や被ばく治療に役立つなどの名目で被ばく者をモルモットの

ように扱う「検診」はチエルノブイリ原発事故や東京電力福島第一原発の事故などで被ばくさせられた人びとに対して繰り返し返えされている。

被ばく者は、被ばくさせられた理由と経緯、被ばくした放射線量、被ばくの結果起きる健康への影響、子供や孫への影響、どのような治療が必要か、などについて知る権利がある。一方、被ばく者を診る医師は「検診・診察」でくだした「診断」の結果とそれに対する「治療」法を丁寧に説明し、治療によるリスクとベネフィットについても詳細に説明して被ばく者本人の承諾を得て治療する義務を負う。

治療の最終的な目的は、ストウ医師が小児ガン治療で訴えたトータル・ケアを被ばく者に対しても行うことである。トータル・ケアとは、肉体的健康と精神的な健康の両方を対象とした治療である。本書は、ストウ医師などが行った被ばく者への「検診」の実相を知ること、いまなお生みだされ続けている被ばく者の検診、核時代の被ばく

(6めんからつづく)

大友よふ(全国地婦連会長) 小野周(物理学者)、関屋綾子(元日本YWCA会長) 五氏の呼びかけで「忘れまいぞ『核』問題討論会」はじまりました。「討論会」は、副題に「何が問題か、われわれは何ができるか」を掲げ、問題提起者の報告をうけ、参加者相互の発言・討論を促すというものでした。

第一回は六月一三日、渋谷の全国婦人会館で開かれ、中野さんも発言されています。その一六日後の二九日、中野さんは平和行進を歩くことになるのです(この項つづく)。

者治療を考える格好の機会を与えてくれる。

*著者長澤克治氏は共同通信記者。一九六〇年静岡県沼津市生まれ。筑波大学卒業。広島支局で(被爆半世紀)を、名古屋支局で(ビキニ事件半世紀)など取材。

(とよさき ひろみつ/フォトジャーナリスト)

第五福竜丸元乗組員 小塚 博さん逝去

1月26日、小塚博さんが肺炎のため亡くなりました。享年84歳。小塚さんは21歳のときに第五福竜丸の甲板員となり6カ月後、3航海目に水爆実験に遭遇しました。小塚さんは1990年代中ごろからC型肝炎が悪化し、肝障害による入退院を繰り返しました。静岡では支援の会が発足して2000年8月に船員保険の再適用を認めさせました。これは、第五福竜丸乗組員として被災時の「労災」として、初めて認定を得たケースとなり、その後、C型肝炎を発症している元乗組員への再適用につながりました。

小塚さんの 船員保険再適用への経緯

第五福竜丸の被災者は、放射線の影響による造血機能障害の治療のため大量の輸血をおこなった。そのため後年、C型肝炎ウイルスに感染、後に慢性肝炎、肝硬変、肝臓ガンを発症している。当時の主治医・三好和夫医師（徳島大学名誉教授・故人）は、「感染と被曝は一体の問題として考えるべきだ。国の対策を望みたい」（毎日新聞1995年11月11日関西版）とコメントしている。

小塚さんは、1990年代から肝臓障害に苦しみ、97年静岡で支援の会が間間元医師などによりつくられ、98年9月に船員保険の再適用を求めて静岡県健康福祉部に申請した。これは99年1月県により不承認となったが、3月には静岡県社会保険審査官宛てに審査請求をおこない、5月に審査請求棄却の決定がでた。これには「C型肝炎ウイルス感染は、急性放射能症治療による輸血が原因で感染したものと推定せざるを得ない」との意見が付されていた。

7月、厚生省の社会保険審査会に対し、静岡県の取り消しを求める「再審査」を請求。2000年5月厚生省社会

保険審査会による「公開審査」が開かれた。加療中の本人に代わり、大石又七さんが元乗組員として訴えた。

8月4日、静岡県の請求棄却を取り消すとの判決が届いた。小塚さんの肝炎の入院加療について船員保険が再適用されることになった。

これについて大石さんは、「厚生省の社会保険審査会が、小塚さんの病気はビキニ被ばくと関連があると46年間遡って船員保険の再適用を認めた。実は私はこの決定をもら手を挙げて喜べない。なぜなら行政は当然のことを無視し続けてきたからだ。この間に何人の乗組員が死んだか、半数近い11人だ。この人たちこそが最低でも船員保険の助けが欲しかったろう、遅すぎる」と述べている（「福竜丸だより」2000年9月号）。

その後、大石さんも肝臓ガンの治療、定期健診などへの船員保険の再適用が認められた。ただし、第五福竜丸の元乗組員に対しても国が認めているのは、C型肝炎からくる疾患のみである。

国際平和ビューロー 事務局長来館

2月2日、ヨーロッパの平和団体で120年余の歴史を持つIPB—国際

平和ビューローの事務局長コリン・アーチャー氏が来館しました。同氏は、明治学院大学の高原孝生国際平和研究所長の案内で来館し熱心に見学しました。第五福竜丸が市民運動により保存された経緯や今日の核問題を考えると、この船の存在は極めて重いと感想を寄せました。また、第五福竜丸が東京都の手で保存展示されていることも意義が深いと述べ、帰国してからぜひ都に感想を送りたいとも話されていました（写真右）。

アーチャー氏は、国際平和研究所によるシンポジウム「世界の軍事支出と日本の選択」での報告のために来日しました。

同ビューローは1891年に設立され（スイス・ベルン）、国際紛争などの仲介にあたり、戦争反対、核兵器廃絶などを掲げて活動してきました。1910年にノーベル平和賞を受賞しています。



4月3日開催

お花見平和のつどい 2016

第五福竜丸のエンジンが引き揚げられ、2001年に展示が実現したことで始められた「お花見平和のつどい」は15回を迎えます。今年はエンジン展示の都民運動を担った経緯、実現までの取り組みなどを直接携わった方がたのお話を中心にしながらたどります。

エンジンの展示を記念して東京地婦連により植樹された八重紅大島桜も枝を大きく伸ばしています。

4月3日（日曜日）午前11時より2時30分まで

会場：第五福竜丸展示館前ひろば

〈10時半より新木場駅前から送迎車がでます〉

展示館開館40年記念会のお知らせ

5月29日（日）午後2時より、神保町の学士会館にて開催します。参加費6000円。40年記念誌の刊行、企画展などをおこないます。